

【研究論文】

日本人 L2 中・上級学習者の英語抽象名詞の可算化に関する

定性、特定性からの正用・誤用分析

愛知産業大学短期大学 准教授 西田一弘

[要旨]

日本人の抽象名詞と冠詞の使用に関しては、5つの項目（抽象名詞、a(n) 抽象名詞、the 抽象名詞、the 抽象名詞 s、抽象名詞 s）の内、最後の項目を除く4つの項目で有意差が出た。即ち、抽象名詞と冠詞の使用の習得に関しては、統計的には問題がないとは言えるが、英語母語話者の習得に差があるのは明らかである。特に、①不定冠詞 a(n)と単数名詞の共起（正用率 68.7%）と、②定冠詞 the と単数名詞の共起（正用率 75.7%）に問題がある。さらに、日本人の抽象名詞と冠詞の使用に関しては、定性、特定性の意味素性に着目したところ、4つの項目(+d +s, +d -s, -d +s, -d -s)の内、使用数が極端に少ない[+d -s]を除く3つの項目で有意差が出た。即ち、抽象名詞と冠詞の習得に関しては、統計的には問題がないとは言えるが、英語母語話者の習得に差があるのは明らかである。特に、[-d +s]においては、「定性重視の英語母語話者と特定性重視の日本人 L2 学習者においては誤用が多くなる」という仮説通り、正用率が 72.5%と誤用が多かった。

1. 研究の背景・目的

冠詞システムを持たない日本語を母語とする英語学習者にとって、英語の冠詞を学習することは非常に困難である(Grannis 1972; Whitman 1974; Master 1990)。冠詞の誤用の理由について、学習者の冠詞選択理由を考慮して分析している研究は少ない (Akamatsu & Tanaka 2008; Butler 2002)。従来の量的研究手法だけでなく、質的研究手法と組み合わせた形で行った研究となると、さらに限られる (Butler 2002)。名詞と冠詞の共起に関する研究は多数存在するが、抽象名詞に限定した冠詞の誤用の研究はない。そこで、日本人 L2 中上級学習者が、抽象名詞の可算化について、どのような誤用が生じているのか、またその理由は何かを探る。筆者が中上級学習を選んだのは、中上級者でも誤用が多いならば、英語の抽象名詞と冠詞も共起の習得は、日本人全体が抱えている問題と考えられるからである。

2. 先行研究

(1) 冠詞の決定要因：定性と特定性

冠詞の適切な選択には、英語特有のものの見方、認識のあり方が不可欠である。英語冠詞の基本体系の理解には、①名詞の意味対象に個としての形や姿が認められるか、②特定対象の指示同定に必要な情報知識が話し手と聞き手の間で共有されているか、この2点に関する判断が必要となる (関口 2016)。しかるに抽象名詞には前者は考慮しにくいので、②

が焦点となる。①に関しても具象性が高まっていると判断される場合は加算化が起きていると考えられるが、その要因は②と相まって個別の抽象名詞で再検討が必要である。定性 (definiteness) は聞き手の立場からの分類である。即ち、聞き手が知っている (と話し手が認める) 名詞句が 定名詞句 (definite NP) となる (Chafe 1976; 金水 1986)。特定性 (specificity) とは、問題となっている名詞が具体的に指している対象を話し手が頭に思い浮かべているかどうかを表す概念である (Ionin et al. 2004; 石田 2002)。石田 (2002) は定性から、織田 (2002) は特定性から名詞につける冠詞の条件を説明しようとしている。Ionian et al. (2004) は定性と特定性が冠詞選択を支配するパラメータの 2 つの主要な意味素性であり、L2 学習者が正しいパラメータをセットし冠詞を使用することができない流動性を生み出しているとしている。定性により冠詞が決まり、その後特定性から冠詞の選択が起こる。つまり、定性が特定性より影響力が強い。当然、[+d -s]、[-d +s] の場合、定性か特定性かどちらにより大きな影響を受けるのかが問題となるが、定性により大きな影響を受けていると考えられる。

母語話者の第二言語獲得における冠詞の個別性と普遍性の研究で、母語話者は定性を基に、日本人 L2 学習者は特定性を基に冠詞を選択するとしている (Hawkins et al. 2005)。以下がその内容である。

1. 特定性に基づいて冠詞を選択する場合 (D=determiner : 限定詞)
 - ① [D, -definite, +singular] : a(n) * 抽象名詞の場合は、すべてが a と共起するとは限らないと思われる。
 - ② [D, +definite, ±singular] : the
 - ③ [D] : φ * 内容は明示されておらず。
2. 定性に基づいて冠詞を選択する場合
 - ① [D, -specific, +singular] : a(n) * 抽象名詞の場合は、すべてが a と共起するとは限らないと思われる。
 - ② [D, +specific, ±singular] : the * 抽象名詞の場合は、すべてが the と共起するとは限らないと思われる。
 - ③ [D] : φ * 内容は明示されておらず。

上記内容から、日本人 L2 学習者は +definite, -specific の時、the の代わりに a(n) をつける誤用を多く、-definite, +specific の時、a(n) の代わりに the をつける誤用を多いと推測されるが、どのような時に φ となるのかは明らかにされていない。以下をまとめると表 1 のようになり、+d -s、-d +s で定性の影響と特定性の影響により冠詞の使用に違いができることになる。

表 1. 定性と特定性と冠詞の共起

抽象名詞	+d +s	+d -s	-d +s	-d -s
定性の影響	the	the	a(n)	a(n)
特定性の影響	the	a(n)	the	a(n)

(2) 冠詞の決定要因: その他の意味素性

定性、特定性が名詞と冠詞の共起を決定する上で重要な意味素性であると考えられるが、定性のみ、特定性のみ、定性と特定性（定性が主要で特定性が補助）が重要なのかは確定的ではない。ここで、他の意味素性を例示する。

表 2. 抽象名詞の素性分析要素（浅原, 2017）

素性	feature	特徴
定性	deniteness: hearer-identify	言語受容者が外延の示す実体を認識できる(definite) か否(indefinite) か。
共有性	commonness: hearer-new	共有性は、言語需要者側が既知であると、言語生産者が想定している(hearer-old) か否(hearer-new) かを判定する。談話上、世界知識を利用して想定可能(bridging) である場合を許す。
特定性	specificity: speaker-identify	言語生産者が外延の示す実体を認識できる(specific) か否(inspecific) か。
情報状態	information status: speaker-new	談話中に同一指示名詞句が出現した(discourse-old) か否(discourse-new) か。既存の共参照情報ラベルを見ながら判定する。想定可能(bridging) は言語受容者側の判断として、共有性に委ねる。
動作主性	agentivity	節レベルで動作主(agent)・被動作主(patient) になるかを判定する。従属節側と主節側の両方で検討するため、どちらも可(both) も許す。
有生性	animacy	名詞句が指示しているものが生きているか(animate) か否(inanimate) かを述語を見ないで判定する。
有情性	sentience	名詞句が指示しているものが自由意志を持つ(sentient) か否(insentient) かを述語-項の対を見て判定する。

さらに、分割性(partitivity) : ある決定詞句 が事前に談話の中で導入された集合に属しているかどうか(Ionin, et al. 2004, 2010)、特別陳述知識 (especially stated knowledge) : 話者の明示的陳述かどうか (Trenkic 2008)、など定性と特定性以外の意味素性を提示されているが、冠詞と名詞を共起させる決定的な意味素性は定かではない。

本研究では、これらの意味素性の内、最も一般的である、定性、特定性に焦点を絞り、日本語を母語とする L2 英語学習者への冠詞選択に与える影響を検証する。なお、過去の研究では名詞（具象名詞と抽象名詞など）を区別することはないが、日本人が苦手である抽象名詞と冠詞の共起に絞って議論を進める。

3. リサーチ クエスチョン

1. 日本人 L2 学習者の抽象名詞の誤用が多い抽象名詞と冠詞の共起はどのような状態なのか、またその理由は何か。
なお、抽象名詞の誤用とは「抽象名詞と冠詞との共起に関する理解の問題」に集約できる

と考えられる。

2. 抽象名詞がどのような意味素性の状態の時に、日本人 L2 学習者の誤用が多いのか、また、その理由は何か。

なお、抽象名詞と冠詞の共起に関する理解においては、抽象名詞の持つ様々な意味素性において、影響力があり、かつ英語母語話者と日本人 L2 学習者の理解の違いを調査することが有効だと考えられる。

4. 仮説

定性と特定性が共にプラスまたは共にマイナスの場合は、日本人 L2 学習者は誤用が多い。反対に、定性と特定性がプラス・マイナスまたは、マイナス・プラスの場合は誤用が少ない。これは前者では選択を迷う意味素性が存在し、後者では存在しないからである。即ち、[+d +s]、[+d -s]、[-d +s]、[-d -s]の4項目中では、[+d -s]、[-d +s]で誤用が多く、[+d +s]、[-d -s]で誤用が少ない。

5. 研究方法

(1) 調査

1. NICER の NNS (L2 中上級者) に対して、抽象名詞の可算化に関する正用・誤用を調査する。被験者は 349 名 (JPN501~JPN849)。
2. 調査する抽象名詞の誤用 (ネイティブチェックが入っているもの) は、①抽象名詞 (冠詞はつかず)、②不定冠詞 a(n)+抽象名詞、③定冠詞 the+抽象名詞、④定冠詞 the+抽象名詞 s、⑤抽象名詞 s (冠詞はつかず)、の 5 パターンに関するものである。なお、冠詞と抽象名詞の間の形容詞の有無は問わない。
3. 抽象名詞の可算化に関する誤用の多かった抽象名詞を特定する。

(2) The Nagoya Interlanguage Corpus of English Reborn (NICER) 1. 1. 1. (2018-04-05)

NICER は名古屋大学の杉浦正利氏を中心となって作成、公開されている日本語を母語とする英語学習者を例に、第二言語の知識・処理能力がどのようになっているかを解明するために構築している学習者コーパスである。

(http://sgr.gsid.nagoya-u.ac.jp/wordpress/?page_id=1014 2019年5月26日検索)

特定の語彙の使用例を検索するには WebGrep for NICER が有効である。

(<http://mercury.gsid.nagoyau.ac.jp/nicer/search/> 2019年6月6日検索)

(3) 調査結果

表 4 は調査の結果、10 個以上の誤用があったもので、抽象名詞と冠詞の共起を単数形と複数形に分け、それぞれの単語についての正用と誤用をまとめたものである。誤用に関しては正用に修正されたものの数 (トークン) を表示した。なお、“sport”も誤用が多かったが“sports”として使用することが圧倒的に多いので、今回の統計処理では省いた。

表 3. 抽象名詞の正用／誤用の分類（トークン）—冠詞と抽象名詞—

抽象名詞	単数形			複数形		合計
	—	a(n) —	the —	the —s	—s	
sports	29/24	20/38	8/1	936/0	25/5	1018/68

表 4. 抽象名詞の正用／誤用の分類（トークン）—冠詞と抽象名詞—

抽象名詞	単数形			複数形		合計
	—	a(n) —	the —	the —s	—s	
activity	12/12	2/0	4/1	26/2	0/0	44/15
chance	13/11	13/3	4/0	8/1	1/0	39/15
education	321/15	1/12	11/6	1/0	0/0	334/33
effect	5/0	2/8	7/1	18/2	3/3	35/14
examination	15/0	6/3	30/18	24/4	4/0	79/25
experience	21/7	3/1	8/1	19/1	1/0	52/10
game	8/18	21/0	51/12	81/3	9/0	170/33
government	4/14	0/1	18/0	2/0	2/0	26/15
job	32/23	28/0	9/3	25/3	0/0	94/29
language	20/0	16/9	15/4	19/3	1/0	71/16
life	159/1	17/15	5/1	65/17	1/0	247/34
opportunity	4/7	2/2	6/2	14/0	0/0	26/11
problem	30/0	9/10	9/8	52/15	11/0	111/33
reason	17/1	8/6	45/9	82/19	18/0	170/35
skill	45/6	0/2	6/1	55/5	0/0	106/14
subject	1/0	6/0	2/1	37/12	3/0	49/13
system	34/0	6/7	26/18	6/5	3/0	75/30
time	199/26	28/2	27/7	20/2	0/0	274/37
way	34/8	12/1	44/12	16/0	2/0	108/21
合計	974/149	180/82	327/105	571/94	59/3	2110/433

10 個以上の誤用があったもので、正用に修正されたものの数

表 5 は表 4 の合計数のみ再掲載したものであり、これを使用しカイ 2 乗検定を実施した。

表 5. 抽象名詞の正用／誤用の分類（トークン）の合計—冠詞と抽象名詞—

抽象名詞	単数形			複数形	
	—	a(n) —	the —	the —s	—s
正用	974	180	327	571	59
誤用	149	82	105	94	*3
合計 (正用／合計)	1123 (86.7%)	262 (68.7%)	432 (75.7%)	665 (85.9%)	62 (95.2%)

英語 L2 中上級者の抽象名詞の正用、誤用の—、a(n) —、the —、the — s (—s は実例不足のため検証できず) ごとの頻度について、クロス集計を行った。カイ 2 乗検定を行ったところ、 $\chi^2(3) = 68.037$ 、 $p < 1.123e-14$ となり、偏りは有意であった。また、クラメールの連関係数を算出したところ、 $V = 0.166$ となり、小さな効果であった。残差分析を行ったところ、以下の残差の一覧のとおり、4 つの項目において正用と誤用に有意差があった。なお、フィッシャーの正確確率検定においても $p < 1.35e-13$ となり、偏りは有意であった。

表 6. 残差分析（カイ 2 乗検定：抽象名詞の正用／誤用の分類（トークン）
—冠詞と抽象名詞—

抽象名詞	—	a(n) —	the —	the —s
正用	1.207661e-06	2.634014e-10	2.460079e-05	1.108740e-02
誤用	1.207661e-06	2.634014e-10	2.460079e-05	1.108740e-02

表 7 は調査の結果、10 個以上の誤用があったもので、それぞれの単語について正用と誤用を定性と特定性についてまとめたものである。誤用に関しては正用に修正されたものの数（トークン）を表示した。

表 7. 抽象名詞の正用／誤用の分類（トークン）—定性と特定性—

抽象名詞	+d +s	+d -s	-d +s	-d -s	合計
activity	16/3		6/3	22/9	44/15
chance	6/3		27/11	6/1	39/15
education	149/2		30/27	155/4	334/33
effect	10/4		24/10	1/0	35/14
examination	44/19		20/5	15/1	79/25
experience	22/8	1/0	19/0	10/2	52/10
game	73/9		36/16	61/8	170/33
government	21/15		1/0	4/0	26/15
job	31/2		50/22	13/5	94/29
language	29/4		9/8	33/4	71/16
life	144/20		79/14	24/0	247/34
opportunity	6/3		12/7	8/1	26/11
problem	50/11		26/20	35/2	111/33
reason	91/18		69/17	10/0	170/35
skill	38/2		46/9	22/3	106/14
subject	13/5		4/8	32/0	49/13
system	58/21		16/9	1/0	75/30
time	95/10		98/27	81/0	274/37
way	68/5		31/16	9/0	108/21
合計	964/164	1/0	603/229	542/40	2110/433

表 8 は表 7 の合計数のみ再掲載したものであり、これを使用しカイ 2 乗検定を実施した。

表 8. 抽象名詞の正用／誤用の分類（トークン）の合計—定性と特定性—

抽象名詞	+d +s	+d -s	-d +s	-d -s
正用	964	*1	603	542
誤用	164	*0	229	540
合計	1128	1	832	582
(正用／合計)	(85.5%)	(100%)	(72.5%)	(93.1%)

英語 L2 中上級者の抽象名詞の正用、誤用の+d +s、+d -s、-d +s、-d -s (+d -s は実例不足のため検証できず) ごとの頻度について、クロス集計を行った。カイ 2 乗検定を行ったところ、 $\chi^2(2) = 112.27$, $p < 2.2e-16$ となり、偏りは有意であった。また、クラメールの連関係数を算出したところ、 $V = 0.21$ となり、小さな効果であった。残差分析を行ったところ、以下の残差の一覧のとおり、3 つの項目において正用と誤用に有意差があった。

なお、フィッシャーの正確確率検定においても $p < 2.2e-16$ となり、偏りは有意であった。

表 9. 残差分析 (カイ 2 乗検定: 抽象名詞の正用/誤用の分類 (トークン)
— 一定性と特定性—

抽象名詞	+d +s	-d +s	-d -s
正用	0.002803652	9.83857e-23	1.12001e-13
誤用	0.002803652	9.83857e-23	1.12001e-13

6. 考察

(1) リサーチ クエスチョンの検証

リサーチ クエスチョン:

1. 日本人 L2 学習者の抽象名詞の誤用が多い抽象名詞と冠詞の共起はどのような状態なのか、またその理由は何か。
2. 抽象名詞がどのような意味素性の状態の時に、日本人 L2 学習者の誤用が多いのか、また、その理由は何か。

1. 日本人の抽象名詞と冠詞の使用に関しては、5つの項目の内4つの項目で有意差が出た。即ち、抽象名詞と冠詞の使用の習得に関しては、統計的には問題がないとは言えるが、英語母語話者の習得に差があるのは明らかである。特に、①不定冠詞 a(n) と単数名詞の共起 (正用率 68.7%) と、②定冠詞 the と単数名詞の共起 (正用率 75.7%) に問題がある。さらには、なぜ無冠詞の複数形では、統計処理ができない位に誤用が少なく (3例)、使用例も少ないのか (正用 59例) の理由は探求すべきものである。
2. 日本人の抽象名詞と冠詞の使用に関しては、定性、特定性の意味素性に着目したところ、4つの項目の内、[+d -s] を除く3つの項目で有意差が出た。即ち、抽象名詞と冠詞の習得に関しては、統計的には問題がないとは言えるが、英語母語話者の習得に差があるのは明らかである。特に、[-d +s] においては、正用率が 72.5% と誤用が多かった。さらには、[+d -s] は正用(1例)、誤用(0例)共に使用が少ない理由も明らかにする必要がある。

(2) 仮説の検証

仮説: [+d +s]、[+d -s]、[-d +s]、[-d -s] の4項目中では、[+d -s]、[-d +s] で誤用が多く、[+d +s]、[-d -s] で誤用が少ない。

仮説通り、[-d +s] においては正用率が 72.5% と誤用が多かった。一方、[+d -s] は使用(1例)も誤用(0例)も極端に少なく、今後その理由を探る必要がある。

7. 今後の課題

以下の項目を今後検証したい。

1. 今回の両調査における使用 (正用、誤用共) の少ない項目における理由を探求する。

2. 英語母語話者と日本人 L2 学習者共に、Φ（単数名詞／複数名詞）の時は抽象名詞はどのような意味素性の状態なのか、不定冠詞 a(n) が付く時は抽象名詞はどのような意味素性の状態なのか、定冠詞 the が付く時は抽象名詞はどのような意味素性の状態なのかを検証したい。
3. 抽象名詞と単数形・複数形並びに冠詞の共起に関して、定性、特定性において、英語母語話者と日本人 L2 学習者で認識に差があるのか、また、差があるとしたら、その理由は何かを検証したい。
4. 今回は定性、特定性を使用して抽象名詞と冠詞の加算化を検証したが、他の有効な意味素性があるのか、あるとしたらそれは何かを検証したい。
5. 今回誤用の多かった 19 の抽象名詞の特徴はいかなるものかを探求したい。

参考文献

- 1) Akamatsu, N., & Tanaka, T. The use of English articles: An analysis of the knowledge used by Japanese university students. *ARELE (Annul Review of English Language Education in Japan)*, 19, 2008. pp. 81-90.
- 2) 浅原正幸 「読み時間と情報講座応について」 『言語資源活用ワークショップ 2016 発表論文集』 国立国語研究所学術情報リポジトリ 2017
- 3) Butler, Y. Second language learners' theories on the use of English articles: An analysis of the metalinguistic knowledge used by Japanese students in acquiring the English article system. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 2002. pp. 451-480.
- 4) Chafe, W. L. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. in Li. C. N. (ed.). *Topic and Subject*. Academic Press. 1976.
- 5) Grannis, O. C. The Definite Article Conspiracy in English. *Language Learning*, 22, 1972. pp. 275-289.
- 6) Hawkins, Roger et al. "Accounting for English interpretation by L2 learners," ms., University of Essex. 2005.
- 7) Ionin, T., Ko, H. & Wexler, K. "Article semantics, in L2 acquisition: The role of specificity." *Language Acquisition* 12, 2004. pp. 3-69.
- 8) Ionin, T., Ko, H. & Wexler, K. The role of presuppositionality in the second language acquisition of English articles. *Linguistic Inquiry*, 41, 2010. pp. 213-254.
- 9) 石田秀雄 『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店 2002 p. 68
- 10) 金水敏 「連体修飾成分の機能」 『松村明教授古稀記念 国語研究論集』 明治書院 1986
- 11) Master, P. Teaching the English articles as a binary system. *TESOL Q.*, 24(3), 1990. pp. 461-478.
- 12) 織田稔 『英語冠詞の世界』研究社 2002 p. 6
- 13) 関口智子 「英語冠詞指導再考」 『専修大学外国語教育論集』 専修大学外国語教育研究室 2016 pp. 145-166

- 14) Trenkic, D. The representation of English articles in second language Grammars: Determiners or adjectives? *Bilingualism: Language and Cognition*, 11, 2008. pp. 1–18.
- 15) Whitman, R. L. Teaching the article in English. *TESOL Q.*, 8(3), 1974. pp. 253-262.